令和５年度第２回葉山町総合教育会議　会議録

１　開会年月日　　令和６年１月２４日（水）
２　開会場所　　保育園・教育センター会議室
３　出 席 者　　町　長　　山梨崇仁
　　教育長　　稲垣一郎
　　教育長職務代理者　　小峰みち子
　　教育委員　　鈴木伸久
　　教育委員　　下位勇一
　　教育委員　　清水衣里
４　出席職員　　教育部長　　中川禎久
　　教育総務課長　　虫賀和弘
　　学校教育課長兼教育研究所長　　濵名恵美子
　　生涯学習課長　　守谷悦輝
　　関 係 者　　学校教育課指導主事　　松本美穂
　　ことば・きこえの教室
　　総括教諭　　小野彰久
　　教諭　　奥村大樹
　　葉山小学校長　安達禎崇
５　議　　長　　町　　長　　山梨崇仁
６　書　　記　　教育部長　　中川禎久
７　開　　会　　午後２時００分
８　閉　　会　　午後３時５５分
９　協議事項　　（１）葉山町の支援教育について
　　～現状と課題・そしてこれから～
　　（２）その他

（開会宣言）

教 育 部 長）　ただいまから令和５年度第２回葉山町総合教育会議を開会いたします。
時刻は14時です。
総合教育会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の４第１項」の規定により設置され、同条第３項の規定により、町長が招集することとなっております。

本会議は、地方公共団体の長と教育委員会という対等な執行機関同士の協議及び調整の場という位置づけであり、会議において調整がついた事項は、それぞれが尊重義務を負うものの、この場で決定を行うものではありません。また、地方公共団体の長の諮問に応じて審議を行う諮問機関でもないことを申し添えます。

それでは、総合教育会議設置要綱第４条の規定により、「町長は、会議を招集し、その会務を総理する。」となっておりますので、これ以降の進行は山梨町長にお願いいたします。

町　　長）　皆様よろしくお願いします。

それでは初めに、本日傍聴人の方、お１人いらっしゃることを確認させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

（葉山町の支援教育について）

町　　長）　それでは、お手元の次第にのっとりまして会議を進めてまいりたいと思います。

２番の協議事項に入ってまいります。（１）「葉山町の支援教育について～現状と課題・そしてこれから～」という議題でございます。

本件につきまして、初めに学校教育課の松本指導主事からご説明を頂きたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

学校教育課指導主事）　松本がご説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

葉山町の支援教育について、現状と課題、そして今後の方策、取組をお話しさせていただきます。

現在の葉山町の課題について考えたところ、多くの課題が課内でも挙げられました。早い段階の教育相談、専門性、不登校、支援級児童・生徒数の増加、支援級の在り方、小・中連携、アセスメント、支援員、多様な居場所、個に応じた支援などです。これらの幾つかの課題の中から、不登校と個に応じた支援について本日はお話しさせていただきたいと考えています。１つ目、不登校、２つ目、個に応じた支援とさせていただきます。

まず１つ目の不登校についてです。学校が電話や家庭訪問等のアプローチをしてもなかなか反応がなかったり、コンタクトの取れない家庭があることで、具体的な支援に至っていないというケースがあります。

２つ目が個に応じた支援についてです。特別支援学級の在籍児童・生徒数が増加をしております。葉山町においては、平成26年からの10年間でこのような推移を示しております。小学校が赤い線、中学校がオレンジ色、そして小・中の合計が緑色のグラフになっております。また、通常級においても支援や配慮が必要な

児童・生徒が増加しております。これらのことから、小・中学校の子どもの発達段階や児童・生徒理解を基盤に置きながら、小・中学校の９年間を見通した継続した支援、つまり小学校・中学校段階で切り分けられるのではなく、子どものこれまでの育ち、現状、これからどうしていきたいのかを一緒に考える継続した支援が大切であると考えています。

それでは、このような流れでお話しさせていただきます。まず令和４年度不登校、いじめについてです。全国の不登校児童・生徒数が約30万人、いじめの認知件数が約66万件となっております。このうち葉山町につきましては小学校・中学校の不登校数が、小学校44人、中学校55人となっております。全国の約30万人のうち、学校内外の専門機関等で相談・指導等を受けていない小・中学生は３分の１に当たる11万4,000人です。この数字は過去最多になっております。学校内外ということで、学校内の専門機関となりますと、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、養護教諭、教育相談コーディネーターが挙げられます。学校外の専門機関としては、教育支援教室、フリースクール、児童相談所、クリニック、教育センター相談室などが挙げられます。これらの相談・支援を受けていない学生ということになります。

いじめの認知件数につきましては全国が約66万人になります。様態別状況で見ますと、冷かしやからかい、嫌なことを言われる、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりするという状況に加えて、近年、パソコンや携帯電話等で誹謗中傷や嫌なことをされるという項目の割合が増加傾向にあります。

国としましては令和５年３月にＣＯＣＯＬＯプランということで、不登校・いじめ緊急対策パッケージを取りまとめ、さらに前倒しをして、令和５年度補正予算案として考えている状況です。

続きまして、葉山町の不登校の現状です。葉山町の不登校もこの10年間で棒グラフのように急増している状況にあります。具体的には、昨年度小学校44人、中学校55人になっております。小学校44人のうち、卒業生と新１年生を除いて継続している人数が14人、それに加え、改善傾向の児童が８人になっております。中学校につきましては、55人のうち、卒業生や新入学生を除きまして、継続しての不登校が24人、改善傾向の生徒が５人となっております。

葉山町のいじめの現状については、小学校のいじめ認知件数が昨年度185件、中学校が15件です。これらは過去最多ですが、このいじめの認知件数につきましては、町で設置しているいじめ問題対策連絡協議会でいじめの定義について確認していることから、いじめの定義が周知され、軽微なものまで件数として上がって

いる。つまり、小さないじめであっても、教職員が認知することができていると捉えております。

続きまして、不登校児童・生徒への課題と対応です。小学校不登校児童44人のうち無気力、不安が理由の児童が42人、中学校55人のうち、学業の不振を理由とする生徒が19人、無気力、不安、そしていじめを除く友人関係をめぐる問題が理由として続いております。

冒頭でもお伝えしましたように、家庭訪問や電話等でアプローチをしても反応がない、コンタクトが取れない家庭について、さらに葉山町のほうでも相談機関や指導につながっていない児童・生徒は、この不登校の児童・生徒数の３分の１になっておりますので、こちらの児童・生徒についてどのような対応をするかということが課題になっております。

考えている対応としましては、現在、各校からその月の児童・生徒の欠席日数と要因の報告を毎月頂いているところですけれども、さらに新年度より実態把握・分析を行いやすいものへ工夫・変更していこうと思っています。

このシートについては、主たる要因はもちろんのこと、校内外の施設、外部機関とのつながり、そして状況、さらに文章入力で、教育委員会担当が見ても共有しやすいような文章入力をお願いするようにしています。さらなる対応としまして、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携・活用を重視しています。

昨年度、いじめや不登校の数が過去最高であったことから、県はスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを拡充しています。スクールソーシャルワーカーについては、特に他機関との円滑な連携の仲立を行うことで、よりよい子どもの環境を設定・構築する働きがあります。葉山町も時間的には変わっていませんが、スクールソーシャルワーカーが２人体制になりまして、２人のそれぞれの視点から活躍していただいている状況です。昨年度につきましては、小学校16人、中学校18人で、学校内外で相談機関につながっていない児童・生徒がいらしたのですが、さらにスクールソーシャルワーカーと情報共有を綿密に行うことで、ケース会議を積極的に行ったというケースが今年度多くありました。

続きまして、不登校の対応について深めていきますと、不登校児童・生徒の居場所として、リソースルームという居場所を設置しております。教室には入れないのですが、別室での登校ならできるという児童・生徒を対象にした教室です。現在は長柄小、一色小、南郷中学校に設置しておりますけれども、来年度に向けて、上山口小、葉山小、葉山中学校が設置を予定、整備に取り組んでおります。

その中でも、現在長柄小の利用児童としては、毎日利用している児童が10人、時々利用している児童が５人、休み時間の利用だけの児童が10人程度となっております。長柄小学校のリラックスルームで見てみますと、教室の真ん中に大きなテーブル、あとは個別の指導ブースが幾つか設けられていて、特に音に敏感な児童についてはヘッドホンの用意もしています。さらに児童によるルールづくりを行ったり、音楽を流してリラックスする空間をつくったり、職員室とオンラインでつながり子どもたちが安心して過ごすことができる居場所づくりに取り組んでいます。南郷中学校は長柄小学校と同じように、教室の真ん中に大きな机を置いたり、リラックスできるソファーを設置したりですとか、あとは個別の指導ブースを設けたり、できるだけ長柄、南郷のリソースルームが同じような環境で、小学校から中学校に進級した際に、環境の大きな違いがないように工夫されています。一色小学校についてはパソコンルームを整備し、個別の学習スペースを設けております。

さらに、町の施策Ｉとして、現在まで学習面においての小・中連携を進めてきました。ご存じの部分も多いかと思いますが、例えば令和４年の後期に、小学校６年生に算数でＴＴとして配置されていた町費教員の先生を、次、子どもたちが中学校に進学したときに今度は中学校に出向いて、小学校で顔見知りだった先生が中学校でもＴ２として数学を教えてくれることによって、見慣れた顔があって質問もしやすいというような関係づくりを大事にした、町費教員を活用してきました。そこを来年度から、支援の観点からリソースルームでも同じような小・中連携ができないかと考えました。具体的には小学校のリソースルームに配置していた支援員さんが、子どもたちが中学校に進学するのと同時に、中学校のリソースルームにも顔を出し関わることで、環境が変わっても安心できるような人員配置を進めていきたいと考えています。

支援員の活用としましては、さらに通常級において支援が必要な児童・生徒が増えてきていることもあり、そちらのほうにも支援員を配置していく予定でおります。例えば、通常級において支援が必要な児童・生徒とはどういうお子さんの状況なのかと言いますと、気持ちの切替えに時間がかかったり、全体指示が入らず、個別の声かけが必要でしたり、板書を書き写すことが難しく、近くで支援、声かけが必要でしたり、小学校時にことば・きこえの教室を利用していた生徒でしたが、中学校に上がって、教科担任によって手だてはしてくださっているものの、もう少し大人の声かけや、何かしらの支援が必要というお子さんもいらっしゃいますので、そういう場面に支援員を活用していきたいと考えています。

これらの支援員ですけれども、児童・生徒数が増加すると支援員も増加する、しなければならないというふうな状況はなかなか難しいので、支援員が教室、各階やフロアを巡回しながら、場面や時間に応じて支援員が配置できるような形で考えていきたいと思っています。

次に、個に応じた支援での課題についてです。特別支援学級において支援計画、指導計画は大切にしており作成もしているのですが、町としての様式が統一されていなかった状況にありました。そこで、小・中連携という意味で、支援計画、指導計画のシートを統一することで、同じ視点での支援がスムーズに継続できることを狙いとしています。

そこで現在、リタリコ教育支援ソフトで実証実験を行っています。このリタリコ教育支援ソフトについて簡単に説明します。まず１つ目がまなびプランという個別の指導計画、支援計画を作成する際に活用するものです。様々多くの視点での見るポイント項目がありまして、その中からその個に応じた項目を選ぶことによって、この個別指導計画、支援計画が具体的になるというところが優れています。また、特別支援学級の児童生徒が増え、特別支援学級の教員が増えている中で、経験が浅い教員であっても、ベテランの先生と同じぐらい子どもたちの支援計画が作れるような、そういう手助けにもなると考えています。この個別の指導計画、支援計画を元にしたまなび教材も活用できますし、さらに子ども理解のまなび動画についても、このリタリコのソフトには入っておりますので、活用ができます。実際、現場の声としましては、アセスメントを実施していく中で、子どもの特性や困りの把握につながった、支援級全体で共有しやすくなったというお声も伺っています。さらに、まなび教材でアセスメントに基づいた児童・生徒に合う教材も選ぶことができたり、動画で支援級の研修を行ったというような報告も頂いています。

続きまして、自死予防についてです。令和４年度、自死について、葉山町では０人となっております。ただ、自死は高等学校で人数が多くなっておりまして、原因の上位は、家庭不和や学業不振、進路に関する悩み、家族からのしつけ、叱責となっています。もしこれが本人の生まれ持っている特性も関係しているとしたら、小学校・中学校で特性について何かしら早期に対応することができたのではと考えることができます。そのための対策としまして、特別支援学級の児童・生徒だけでなく、通常級においても気になる児童・生徒のアセスメントをして、その子自身の自己理解や家庭での理解につながって、よりよい支援を早期から行うことができると考えています。

最後に学びの場についてお話しします。学びの場として、本日後ほど発表がございますが、ことば・きこえの教室が葉山町にあります。通級指導教室の通称で「ことば・きこえの教室」と呼んでおりますが、言語障害教育のセンター的機能を担っています。また、教育支援教室、通称ヤシの実も葉山町にはあります。不登校児童・生徒の集団生活への適応、情緒の安定、基礎学力の補充等、社会的自立を目指すための相談及び指導を行っています。本年度４月の段階で通室生が７人でしたが、12月になり８人、この正規の人数に加え、体験児童・生徒が８人通室している状況にあります。

多様な居場所としましては、葉山町にもありますフリースクール、オルタナティブスクールもございます。12月現在、25人の児童・生徒が通っております。様々な施設がございますので、そちらは資料でご確認ください。

最初にもお伝えしましたが、国のほうでも緊急パッケージとしまして、リソースルームの整備やスクールソーシャルワーカーの活用、そして不登校の実態把握についての推進を訴えているところです。

まとめとしては、１つ目、不登校対策として、不登校の実態把握、分析の強化を行っていきます。未然防止、支援の強化にも取り組んでいきます。

２つ目、個に応じた支援についてです。基本となる個別の支援計画、指導計画を大事にしながら、これに基づく支援内容をさらに推進していきたいと考えています。

そして教育環境の整備です。次年度に向けてリソースルームの人員配置や環境整備について工夫・充実していきたいと思っています。

これらについては、小・中一貫教育による９年間を見通した、継続した支援の充実につなげることが大切だと考えておりますので、ここを大事にして取り組んでいきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

町　　長）　ありがとうございました。

今の学校の不登校の状況等を中心にご説明頂きましたけれども、委員の皆様からご質問やご意見ございますでしょうか。下位さん、お願いします。

下位委員）　今の指導主事の発言にもありましたけど、いじめについて、近年パソコンや携帯電話等で誹謗中傷や嫌なことをされるということが増加傾向とありましたが、やはり全国的なニュースを見るとそういったことが多くなっています。ＧＩＧＡ端末を配備してから３年がもうすぐたつんですけれども、何と、そのＧＩＧＡ端末を使っていじめをするという事案が幾つかあるみたいで、町田市の小学校でそ

のような事案があったことを報道で知りました。町田市の場合はパスワードが全員「１２３４５６７８９」、誰でもなりすましできる状態でした。なので、誰が書き込んだか分からないというようなことがあって、特異な事情なんだと思うんですけれども、葉山では、パスワードは無作為に設定しているのでなりすましはできないと思うんですけれども、ＧＩＧＡ端末だけではなくて、中学生ぐらいになると皆さんもＬＩＮＥもやっていて、部活ＬＩＮＥとかも生徒側で作っているような状況だと思うので、そういうのでもしいじめがあったりとかというのがあれば、ぜひ情報としてまたご報告していただきたいなと思います。

リソースルーム、今ご説明頂いたんですけども、個人的には非常にいい取組だと思っていまして、早く全校に展開してほしいなと前々から思っていました。南郷中と長柄小、何度か行ったことがあるんですけれども、常に児童・生徒さんが結構な人数いらっしゃるんですね。10人以上いるような姿を見たこともあります。この場所は何ていうんでしょう、ほんわかした雰囲気というか。皆さんそれぞれ理由があって、教室には行きたくないという、ここだったら来られるという状況と思いますので非常にいい取組だと思います。

それとやっぱり課題としては、教室の場所、空き教室を使って、パソコンルームの再利用ということも多いと思いますけれども、３階だったり２階だったりとか、皆さんの、ほかの子たちの目を、気にしながら行かなきゃいけないところにあるような気がするんで、その辺りがもしかしたら今後は課題なのかな。

あとは、そこにいる大人、先生方がいらっしゃるわけなんですけど、恐らくそこに対する人員を配置する予算ってきっと今のところないと思うので、手が空いた方がいらっしゃるのか、もしくは、長柄小はボランティアの方も多いっておっしゃっていたので、そこの手当てもこれから何とかしていかないといけないのかなと思って聞いておりました。

以上になります。

学校教育課指導主事）　ありがとうございます。

町　　長）　ありがとうございました。何かありますか。どうぞ、濵名課長。

学校教育課長）　最初のＧＩＧＡ端末を使ってのいじめ案件についてですが、メールを制限している関係もあって、案件としては今のところ、私たちが把握してないだけかもしれませんが、大きな問題にはなっておりません。しかし個人が所有する端末を使ってのＬＩＮＥやＳＮＳを使ってのトラブルは小学校も中学校もあるのが現状です。したがって、子どもたちの使い方の部分を、子どもたちへ指導するだけでなく、保護者の方にもご協力頂くということが大切だと考えております。そういっ

た投げかけを引き続きやっていきたいと思っています。

リソースルームについて、本当におっしゃるとおり、気楽に子どもたちが利用できるということが理想だと思います。そこの充実は、これから来年度に向けて、財政的なところも含めて、町長もご理解を頂いているかなと思っております。先ほど国のパッケージが出てたところの校内支援教室の充実については緊急課題として挙げられております。来年度、そこも国としても予算をつけて、校内支援教室の充実に向けて支援員を配置する予算が来るということも聞いております。そういったところと、町の資源等を利用しながら、さらなる推進を進めていきたいと思います。

併せて、ボランティアの方の活用というところも大きな部分だと思います。活用を進めるためには、ボランティアの方にもその趣旨をしっかりご理解頂くということが大事だと思いますので、様々なところからアプローチしながら支援の充実に努めていきたいと思っております。

下位委員）　ありがとうございます。よろしくお願いします。

町　　長）　ありがとうございました。ほかにはいかがでしょうか。

小峰委員）　質問させていただきます。

町　　長）　どうぞ、お願いいたします。

小峰委員）　リラックスルームあるいはリソースルームに通う子、手続上にどういうことが必要なのかという質問です。通うために、子どもはそのときに思いついたら行っていいのか、あるいは保護者の同意が必要なのか、学校の中でどんな手続があるのか、あるいはないのか、その辺りを教えていただきたい。教育委員会でご存じだったら教えていただきたいと思います。

町　　長）　濵名課長。

学校教育課長）　教育委員会のほうで把握できておりません。おそらく今の現状としては担任の先生が把握したうえでリソースルームを利用している状況だと思います。

小峰委員）　例えば私が、今日は行きたいなと思っていれば、国語の時間はちょっと向こうへ行きたいということで行けるのか、あるいはそのことを保護者の方はどういうふうに理解しているのか。昨日まで全然行ってなかった子が今日は行きたいって言っても、突然言っても行けるのかどうかという、その辺りはご存じでしょうか。

町　　長）　濵名課長。

学校教育課長）　そこの流れのところは正確に把握できておりません。保護者も含めて、リソースルームを利用できるということはご理解が必要だと思います。ご指摘のとおり、そこら辺の流れをできるだけスムーズに整えることは大切だと思います。ただし、

利用するまでのハードルがあまりにも手続が多いとか、子どもが利用したいってときに利用できない状況はよろしくないと思います。そういった手続の流れも含めて、学校とも確認しながら、有効な利用について進めていきたいと思います。

小 峰 委 員）　ありがとうございました。

町　　長）　よければ、まだ会議続くので、プレゼンテーションのとても大事な、リソースルームのこれから拡大もしていく部分ですから、確認してもらっていいですか。また後ほど報告ください。じゃあ、清水委員、お願いします。

清 水 委 員）　先日、市町村教育委員会研究協議会の『いじめ対策、不登校対策』に出席したばかりなので、葉山町の状況・課題をよりリアルに受け止めさせていただきました。私が一番気になったのが、学校・相談機関等につながっていない小学生が16人、中学校の生徒さんが18人いると。この方たちにスクールソーシャルワーカーによる巡回、情報共有を綿密に実施となっていますが、これは誰がどのように情報共有をしていくのかなというのと、どうアプローチするかを、繊細に考えていかなければいけない問題だと思いました。先生方とソーシャルワーカーが情報共有して教育委員会と連携するのか、どういうように情報共有されているのか、現状を教えていただきたいと思います。

学校教育課長）　教育委員会は月報という形でお子さんの状況を把握している状況です。それに加えて、児童・生徒指導の担当や各学校の教育相談コーディネーター、スクールカウンセラー、ＳＳＷ等含めて月に何回か情報共有する会合がございます。そういったところで、各学校の不登校傾向のお子さんであったり、課題を有するお子さんたちの情報を把握している現状がございます。

そういった状況を踏まえながら、つながってないお子さんに対して誰が何を担うのかということを話し合っております。そこのつなぎが全てが学校の先生方ではなく、医療に繋げなくてはならないお子さんもいらっしゃると思います。それから、子ども育成課や児相等、様々な関連機関とどうつないでいくのかというところがとても大事なことになると思います。そういったつなぎ役をコーディネートするのがスクールソーシャルワーカー、ＳＳＷと呼ばれる人がおります。そういった方の助言等を踏まえ、ケース会議の中で、誰がどういう役割を分担していくのか、支援をしていくという形になります。

つながってないお子さんに関しては、アプローチしても、なかなか保護者の方からリターンが戻ってこないケースや、家庭訪問してもつながらないとか、お手紙書いてもつながらないとかというケースもあります。そういったご家庭については、つながりを切らないことが大事だと思いますので、そこのアプローチの仕

方も含めて課題意識を持って取り組んでおります。

町　　長）　よろしいですか。

清 水 委 員）　現状スクールソーシャルワーカーの方が２名しかいらっしゃらないと思うので、２名で支援につながっているお子さんをケアし、加えて支援がつながってないお子さんのケアもどうやっていくのか、物理的に仕組みづくりが一番重要になると、補足説明を受けて改めて感じました。以上です。

町　　長）　つながってないというのは、親とつながってない。親とつながってないということですか。親と連絡が取れない。

学校教育課長）　そうです、そのケースもあります。保護者のほうにアプローチをしても、なかなか折り返しが学校に来なかったり、面談やスクールカウンセラーと相談するのはいかがですかとかということを投げかけても、なかなか反応が返ってこないご家庭も多々ございます。

町　　長）　形式的な話ですけど、子どもが学校に来ない、親も連絡取れない。例えば、住民票では葉山にいるかいないか確認取るとか、そういうことはやってるんですか。

学校教育課長）　それはもちろんやってます。ただ、なかなか学校のアプローチに対して折り返しがないご家庭も中にはあるという現状はございます。

町　　長）　子どもの所在とか、子どもの生存は確認できてるんですか、学校は。

学校教育課長）　はい。

町　　長）　生存は確認してるんですね。

学校教育課長）　例えば今回、今年から取り入れているＣＯＣＯＯのメールで折り返しがある場合もあります。具体の取組は学校のほうが分かると思いますので、葉山小の安達校長がいらしてますので、そちらからお話しいただいた方がよろしいかと思います。

町　　長）　お願いします。安達校長。

葉山小学校校長）　生存確認については、極端な話で言えば、そういう、連絡が取れない場合、夜に行って電気がつくかとか、そこまでやってます。

その日のうちに、例えば昼間が駄目であっても、夜、電気がついた時点でピンポンを押すと反応があるとか。

町　　長）　そこでお会いできるんですか。

葉山小学校校長）　うちのケースの場合はありました。

町　　長）　そこに子どもはいるんですか。

葉山小学校校長）　それを確認しました。それで解散しました。

町　　長）　虐待とかの可能性もそこには潜んでましたか。

葉山小学校校長）　虐待の可能性や、いわゆるネグレクト、いろいろあります。

町　　長）　そこから児相につなげたりとかするケースってあるんですか。

葉山小学校校長）　児相というか、大体まずは子ども育成につないでとか。

町　　長）　分かりました。ごめんなさい、ちょっと形式的な話ですけども、その流れができてるならいいなと思いまして。ありがとうございました。失礼しました。

ほかにいかがでしょうか。松本先生、先ほどの件があればお願いします。

学校教育課指導主事）　リソースルームについてのご質問ですが、現在設置している小学校で子どもから使いたいという要望はないということです。教師のほうで、クラスで落ち着かない児童や不登校の児童に声かけをして、リソースルームというところがあるんだけどと紹介をしながら、一緒に見にいこうか、こういう部屋だよという説明もして、ああ、じゃあ行きたいな見て見ようかなと本人が言えば、保護者にもお話をして利用しているという現状です。

町　　長）　それはスタートの段階ですね。

学校教育課指導主事）　スタートの段階です。

町　　長）　その後は多分自由に行けちゃう。

学校教育課指導主事）　はい、担任に一言言ってです。どこにいるか分からないと安全確認ができないためです。

町　　長）　よろしいですか。どうぞ、お願いします。

小 峰 委 員）　この支援教育については、この後、皆さんと話し合いをすることになっていて、今は質問の段階ということでよろしいですか。

町　　長）　結構です。そうですね。

小 峰 委 員）　分かりました。

町　　長）　他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

そうしましたら、続けてになります。今度はことば・きこえの教室、今日は小野総括教諭、奥村教諭にお越しを頂いております。ありがとうございます。

では、引き続き、テーマは一緒でございますので、プレゼンテーションのほう、よろしくお願いいたします。

小野総括教諭）　では、ことば・きこえの教室についてということで、具体的にこの教室の指導内容を中心に、年間の中での取組について、このスライドを中心にご説明をさせていただきたいと思っています。

具体的な説明については奥村のほうからさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

奥 村 教 諭）　では、本日はよろしくお願いいたします。ことばの教室担当の奥村と申します。

15分から20分ほどお時間を頂きまして、ことば・きこえの教室についてお話をさせていただきたいと思います。

まず教室の概要について簡単にお話をいたします。保護者を含めた町民の方、それから町立学校の先生方にはことば・きこえの教室、あるいはことばの教室という名前で認知をされておりますが、正式にはこのような名称になっております。お手元に資料もあると思うので、すみません、ご確認ください。

葉山町においてはただ１つの通級指導教室でして、40年近くの歴史がございます。このあまり聞き慣れない言葉かと思いますが、通級というのは、大半の時間通常学級で過ごしまして、人数に応じた必要な指導を決められた時間に通って受ける制度のことを言います。ことばの教室では、言葉や聞こえ、それからコミュニケーションの心配事に関わりまして、町内全ての小学校に在籍する通常学級のお子さんを相談や支援の対象としております。

では、何のために通級をして指導を受けるかということについてお話しいたします。こちらに書かれてる目的は、以前通級をしていた保護者の方がおっしゃってくださった言葉が元になっています。何かができないから通うのではなく、一人一人のお子さんのいいところを伸ばして自信を持たせることを大事にして、その上で苦手なことを乗り越えていけるようにと考えております。お子さんによってニーズは様々ですが、通級指導教室ではこの２つをどのお子さんにも共通する大きな目的に据えまして、一人一人のお子さんに応じた指導や支援を行っております。

それでは、こちらことばの教室が担う教育活動について説明いたします。私たちは子どもの指導、保護者の支援、それから関係機関との連携を教育活動の３本柱として考えています。相談のスタートは、お子さんや保護者、あるいは学校の先生方が困っていることや悩んでることがきっかけになり、それに応じて必要な指導や支援を行います。通われている保護者の方は、お子さんについての困りですとか悩みがあるゆえに、中には心配や不安が大きくなっていったり、親子関係が大変難しかったりするケースも見受けられます。しかし、それだけに保護者を支え、親子関係の改善を一緒に目指していくことは、お子さんを支えることにも直接つながりますので、保護者の支援は指導との両輪として重要視をしています。

また、お子さんや家庭の支援をするに当たっては、学校を初め、関係機関の理解を得ながら連携・協働していくことも非常に大切です。町の関係機関ですと、教育委員会をはじめ、子ども育成課、たんぽぽ教室など、教育や福祉に関わる部署の方と日常的に連携を図っております。

お子さんについての困りや悩みを解消し、こうなりたいという姿に近づいていくために通う教室ですので、子どもの指導を行うことはもちろんですが、言葉の教室としては保護者の支援や関係機関との連携も指導時間同様、欠かせない要素として捉えまして、指導の合間をぬって、午前中から夕方まで、時間を割いて取り組んでいるところです。

お子さんや保護者にとってできないことがあるから代わりに来る場所ではなく、このように総合的な指導・支援を受けることで、在籍している学校、それから学級での生活が充実するための場所であることこそがことばの教室の目標であり、存在意義かなと考えております。

次に、現在の通級の状況についてお話をします。ご覧のとおり、各小学校、それから各学年から通級をしている様子が分かります。現在、通級人数は46名でして、ここ数年おおむね同程度の規模で推移をしております。

こちらが現在の46名のお子さんについて、困りですとか、悩みごとに分類した人数になっております。右上の数字が現在通級しているお子さんの数を表しています。上の段３つのところが、発音の誤りですとか言葉の詰まりなど、いわゆる言葉・聞こえに直接関わる部分になっています。一方、下の段が、例えば言葉がゆっくりであったりですとか、学習やコミュニケーションに課題があったりなど、言葉を活用して何かをすることに関わっています。葉山のことばの教室では、直接言葉に関わることはもちろんですが、言葉を活用することに課題を抱えるお子さんもサポートを受けています。

ここから、ことばの教室の中核であるお子さんの指導について、大きく４つに分けてご説明をさせていただきます。

まず、構音障害、つまり発音の誤りについてです。いわゆる赤ちゃん言葉ですとか、滑舌の悪い状態というのが小学校入学後も続いている場合があります。話し始めの頃であれば、ああ、かわいいなというので済むものも、やっぱり小学校に入りますと音読や発表などの学習ですとか、友達とのコミュニケーション場面で伝わらないということにつながり、そうするとやっぱりうまく話せなくて嫌だなとか、話したくないなというふうに自信を失うことになりかねません。

では、実際に指導を受けることで、どのぐらい発音が変化をするのか、指導前後の音声をお聞きいただければと思います。こちらのお子さんは１年生の夏休み前に担任の先生から相談につなげていただき、２学期から通い始めたお子さんです。まず、初めてことばの教室に来たときに発音の状態をチェックするために、絵の書いてあるカードを見てお話をしてもらった様子をお聞きください。何の言

葉を言ってるかというのは、上にイラストがございますので、そちらを参考にお聞きください。

ありがとうございます。今、「さしすせそ」が「たちつてと」に置き換わってしまっているので、言葉によっては、例えば「さかな」が「たかな」ですとか、「そら」が「とら」と、まるっきり違う意味に伝わってしまいます。ですが、本人はサ行のつもりで一生懸命話していますので、ここで、「たかな」じゃなくて「さかな」だよとか、ほら、間違ってるからもう一回言ってみなさいと言い直させても、本人は正しく直すことはなかなか難しいですし、余計にそれで自信を失ったりですとか、もうお話しすること自体が嫌になってしまったりすることもあります。ことばの教室の指導としては、そういうふうにただ言い直しをさせるのではなく、発音するために必要な口、それから舌の動きですとか、耳で聞き分ける力などをつけながら、正しい発音について順序立てて指導を行います。

では、このような指導を受けることで、先ほどのお子さんの発音がどれぐらい変わるのか、お聞きいただけたらと思います。

ありがとうございます。期間にすると１年半ほどなんですが、指導をこう毎週積み重ねることで発音の誤りは改善されたことが分かるかなと思います。

私たちがこういう専門的な指導を行うためには研修を積んだりですとか、書籍から学んだりすることはもちろん、経験のある指導者に教えてもらう、あと、実際の指導場面を通して学んでいくことも欠かせません。

次に吃音についてです。こちらはよく言葉が詰まるとか、どもるなどと言われることもあります。吃音については話し方そのものへのアプローチも行いますが、心理的な面ですとか、環境面など、お子さんの全体像を捉えて指導や支援を行うことが大切になります。吃音、先ほどの構音障害と異なりまして、根本的な原因ですとか解決法など、まだ実は科学的に解明されていない部分もあります。ですが、この話し方の改善だけではなく、様々な面からアプローチをしていくことが有効だと言われております。

こうした指導に関する専門性ですとか柔軟さはもちろん、きちんとした専門性の裏づけをもって、お子さんの状態に応じて、保護者の方や学級担任の先生、助言や提案をしていくこともことばの教室の役割に含まれています。

今度３つ目は読み書きの苦手さについてです。これは勉強に直結するので、テストの点数ですとか成績など、結果に一番表れやすい部分かなと思います。勉強についての得意、不得意は誰しも大なり小なりあるんですけども、ここでは全般的に知的な遅れがないのに、読む、書くなど、特定の分野について極端に苦手な

状態を指してお話ししたいと思います。

一般的には学習症ですとかＬＤなどと呼ばれておりまして、最近は学習障害などという言葉もメディア等で目にする機会が増えているかなと思います。このＬＤの傾向があるお子さんにとって、読み書きが苦手なのは本人の努力不足ではなくて、脳レベルでの認知機能の弱さですとか、スキルの未熟さが背景にあると言われております。例えば左上の画像は漢字テストで書いた字なんですけども、例えば棒が１本多かったり、突き出るとこが出てなかったり、特徴的な間違いをしていることが分かるかと思います。その下、左下の部分ですが、これは左側の図形を見て、そのまま見て右側に書き写すという課題をやったところなんですけども、この視覚認知と呼ばれる機能が弱いお子さんですと、ご覧のように、見て形を捉えて正確に書き表すこと自体が大変苦手な場合もありますので、こういった力の弱さなどが漢字など、文字の書き誤りに結びついてるケースもあります。

同様に読みについても、単に読めないとか、読むのがうまくないというのではなくて、その背景となる要素が様々考えられます。本来考える力、例えば内容を理解するとか、自分の意見を持ってそれを表わすということ自体はほかの子同様ですとか、それ以上あるお子さんでも、このＬＤの傾向によって基本的な読み書きにつまずいてしまうことがありますので、こうした苦手さそのままにしておくと、勉強が思うようにいかないことはもちろんですし、そこにとどまらず、勉強自体に拒否感が出てきてしまったり、どうせ自分は駄目だとか、根本的な意欲や自信がなくなってしまうこともあり得ます。

こういうＬＤのお子さんの指導では、単にこの勉強をゆっくり丁寧に教えればいいとかというとそうではなくて、先ほどお話ししたような、背景に関して、例えば何を得意としていて、何を苦手としているかなど、詳細を分析、あるいは評価しながら指導を進めていきます。そういう得意・不得意に応じた対応や、本人が理解しやすい学習の方法、苦手な部分を補助、あるいは代替する手段など、個に応じた指導を受けることによって、できるとかできたという成功体験を積んで、最終的には学校の授業で学べることを増やしていくというのが目標になります。

読み書きを含め、学習面に苦手を抱えるお子さんというのは、ＬＤに限らず、例えば言葉の遅れ、言語発達のゆっくりさが関わっている場合もあります。ＬＤの場合は全般的な知的な発達の遅れがないんですが、言葉の遅れですと、語彙や生活習慣、あるいは運動面、行動面など、複数の部分に課題が関係していることもありますので、こちらでの指導の目標ですとか、アプローチの仕方がまた異なってきます。なので、現象、勉強ができないという現象が似てるからといって、

同じような指導をすればいいのではなく、一人一人のお子さんの実態に応じて、様々な要因、あるいは背景を把握しながら、適切な指導・支援をしていく専門性というのも、ことばの教室には求められています。

最後にコミュニケーションに関わる課題です。コミュニケーションと一言で言っても、例えば話し言葉の数が少なくて、人と関わるのが苦手なお子さんから、反対に、言葉よりも先に手が出てしまうようなお子さんまで、その実態は様々です。こうした課題を抱えるお子さんについて、ことばの教室では言葉を使ったコミュニケーションということで指導を行っております。コミュニケーション指導ですと、人とのやり取りを中心に、言葉を使ったやり取りについて指導を行います。ここで特に意識をしているのが、学校生活を考えたときの集団活動です。コミュニケーションが苦手な場合、やっぱり学級の20人、30人、あるいはそれ以上という、集団がとても大きなものなので、まずはこうベースとなる二者関係の中でコミュニケーションを学んだりですとか、少人数のグループ指導を通して学んだことの活用を図ったり、必要に応じて形態を工夫しながら指導していくことが大切になってきます。

ここまで教室の概要、それから指導の内容について、簡単ですがお話をしてまいりました。実は昨年、こちらにあるんですが、保育園・幼稚園の先生向けの、発達支援の専門雑誌に葉山のことばの教室の取材を基に、通級の制度ですとか、それから具体的な指導内容、あとは教室環境など、記事にまとめていただきました。本日ご紹介できなかった部分も含めまして、こういった形で写真やイラストも交えて大変分かりやすい紙面にまとめていただいておりますので、機会があればぜひご覧ください。教室にも１部ございますので、お貸出しすることもできます。

続いては、ここから年間の教室の取組について少しお話をさせていただきます。先ほどもお伝えしたように、ことばの教室では子どもの指導、それから保護者支援、担任をはじめとした関係機関との連携を教育活動の３本柱として大切に考えています。スライドには子どもの指導を年間行いながら、保護者や学校の先生方に関わる取組も教室全体の活動として年間を通じて行っております。

ここからその様子を写真ですとか、参加者の感想を通して簡単にご紹介できればと思います。感想については長くなってしまいますので、お手元の資料で後ほどお目通しいただければ幸いです。

４月に、指導を本格的に始める前の時期に、保護者の方に向けての通級の仕組みですとか、指導で大切にしていることを、今日お伝えしたような内容も含めて

お話をして、通級への理解を図っています。こちらからの説明だけではなく、指導の体験なども交えて行って、言葉を使うことの大切さですとか、指導の雰囲気など、保護者の方も実感できるということも大切にしています。こうした保護者向けの会を行うことで、指導について、あるいは支援について理解を図ることというのは、親御さん方の安心にもつながっている様子です。指導は個別の指導が中心になりますが、４月にはじめの会ということで、スタートの会を行いまして、教室全体として通級への意欲や意識づけを持てるように行っております。

通常の指導に加えまして、夏休みの機会を活用して担任の先生に指導へ参加していただくこともあります。また、今年の夏休みは町内の小・中学校で希望する先生を対象にしまして、通級指導や支援教育で大切にしたいことを一緒に考えるという、拡大担任者会という会を行いました。小学校で通級児童の担任の先生ですとか、以前から通級になじみのある先生に限らず、様々な立場の先生がご参加くださって感想を頂きました。この前ですけど、２学期末のお楽しみ会では、指導の一環としまして、子どもたちが指導の成果や得意なことの発表を通して自信をつけられるような会を、機会を設けています。保護者の方ももちろん、子どもたちもそれぞれお楽しみ会の意義ですとか頑張りを感じ取って参加してくださっているように思います。

これまで葉山のことばの教室について様子を知っていただけたらと思いましてお話をしてまいりました。残りの時間でこの通級に関わる今後の課題についてお話をさせていただきます。

葉山町の通級に関わる課題としては、次のようなものが考えられます。この通級児童数については、例年、年間の中で40人から50人、１学期スタートが40人前後でして、今の時期、３学期ぐらいに50人前後になるということで推移をしておりまして、年々この人数が増える一方であったりとか、際限なく増えているということではありません。ただ、新規の相談ですとか、年度の中で入級や退級があるので、一見この数字には表れないんですけども、年間で15人から20人前後の方が新しく入られて、年間の中で10人、15人前後、卒業ですとか終了という形になるという内訳になってますので、この入れ替わりも考えると、通級のニーズというのは相応にあるのかなと考えられます。

この高いニーズというのは神奈川県全体で見ても同様のことが言えます。これは県内の公立学校の児童数と通級、あるいは難聴級で指導を受けているお子さんの数を表したものになります。線グラフで表したところ子どもの数でして、こちら少しずつ減っているんですが、棒グラフで表した通級の児童数はここ数年同程

度で推移しておりますので、通級に対するニーズというのはほかの自治体を見ても、葉山町同様の傾向があるかなと言えます。

また、葉山町内の各学校の教職員ですとか、私たちことばの教室担当者に関わる部分でも課題が散見されます。若手の先生だけでなく、経験がある先生や管理職の先生であっても、支援教育や通級指導についてきちんと理解していくということは今後ますます大切になっていきます。

もう一つ、スライド右下の部分ですが、中学校への進学時、お子さんが壁にぶつかることは一般的にも中１ギャップなどと言われまして、スムーズな接続が必要だとされていますが、通級のお子さんが抱える課題ですとか、悩みについても同様のことが言えると思います。ことばの教室に関わっても、中学校進学前のお子さんですとか保護者の方が不安を感じたり、入学後に学校生活上、何らかのつまずきが生じてしまったりすることは実際ありまして、私たちもお子さんについて入学前に引継ぎを行ったりですとか、入学後に授業中の様子を見せていただいて、お子さんの現状について一緒に相談したり、中学校の先生方との連携にも努めています。ことばの教室は小学校の通級指導教室なので、中学生のお子さんは直接の通級対象になっていないんですが、関わったお子さんについての教育相談含め、小学校から中学校という移行の中で支援に切れ目がないようにお互いが取り組んでいくということは、今後に向けた課題の一つかなと考えております。

今、お話をしてまいりましたように、現在様々なニーズ、それから課題がありますが、私たちとしては葉山町の通級指導、あるいは葉山町の支援教育全体が充実していくように課題を解決していきたいと考えております。町全体の支援教育という観点で言いますと、私たち担当者４名いるんですが、担当者が各学校を訪問する機会を確保しまして、通級児童のほかにも、例えば校内に気になるお子さんがいらっしゃるようであれば一緒に様子を見させていただいたりですとか、放課後に先生方と情報共有したりしまして、支援の在り方を一緒に相談するという連携も行っております。

今後も新しい課題を前向きに解決していくためには、私たちがこれまで築いてきたものを維持したり継承したりするとともに、教員をはじめ、関係する方々にことばの教室、あるいは支援教育のことをよく理解していただきながら、葉山町の関係者一人一人が通級指導、あるいは支援教育の充実について考えていくことが大切かなと思っております。

終わりになりますが、これまでのまとめとして１つお話をさせていただきます。本日は葉山のことばの教室として教室の取組ですとかその様子、そして今後の課

題についてご説明をさせていただきました。私たちとしても葉山町の通級指導、支援教育をより一層充実していくように努めていきたいと思っておりますが、この通級による指導を充実させるという方向性は、文科省の検討会議においても示されているものです。

この会議では、通級による指導の意義として次のような点が示されています。実はことばの教室では国の特別支援教育に関わるナショナルセンターである国立特別支援教育総合研究所で行われる専門研修の一環として、毎年全国から久里浜にある研究所に研修生として集まる現職の先生方を受け入れまして、ここの葉山のことばの教室で実地研修というものを行わせていただいております。昨年も10月に現職教員の研修生が７名、それから特総研の研究員の先生が２名、また、文科省のほうから特別支援教育課の調査官の先生が１名来室されたので、葉山のことばの教室の役割、運営ですとか、指導の実践について１日日程でお話をさせていただきました。

その際、文科省の特別支援教育の調査官である堀之内先生から、一日の研修を通して次のような感想を頂きましたので、ご紹介をさせていただきます。通級による指導においては、本人や保護者がその仕組みや意義を正しく理解し、納得した上で指導を受け、通級による指導を活用してよかったという成果を出すことが大変重要であります。そして、対象の児童が通級による指導で学んだことを日々の学習上、生活上の困難克服、改善につながっていることを実感し、将来の自立につなげていく必要があります。葉山小のことば・きこえの教室は、これらの点を実現すべく、本人、保護者、担当者、また在籍学級の担任が連携して運営が行われていると感じました。また、担当者の専門性の伝承の工夫がなされていると思いました。改めて通級による指導の意義を確認させていただきました、というお言葉を頂きました。国の特別支援教育を牽引する立場の先生からも、葉山の取組についてありがたいご評価を頂きましたが、私たちとしても引き続き通級による指導の意義ですとか、課題を踏まえて、今後もより一層指導の充実に努めていきたいと考えています。

本日はお時間を頂きましてありがとうございました。これを機に、町長や教育委員の皆様にもことばの教室についてより一層ご理解を頂き、ますますのお力添えを頂ければと思います。今後ともことばの教室や葉山町の支援教育をどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

町　　長）　ありがとうございました。それでは皆さんからご意見ご質問等頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。小峰委員、どうぞ。

小 峰 委 員）　質問です。また手続上のことをお伺いして申し訳ないですけれども、一応看板はことばときこえの教室ということなんですけども、実際には情緒障害のあるお子さんについても受入れをしてるのが現状だと思うんですけども、最初にお声をかけるというか、どういうお子さんを対象にして通級をしていただくようにしているのか、その辺り。親としてはね、聞こえ…難聴ですとか、そういうものに課題があれば素直に申込みができると思うんですけれども、やはりちょっと情緒的に不安定な子について受け入れてもらうのかどうか、そういう教室なのかどうかということも明らかにはなってないと思うので、その辺りはどういうふうにしてお声かけというか、募集というか、受入れを決められるのかというところを伺いたいと思います。

町　　長）　どうぞ。

小野総括教諭）　今ご質問あったとおり、どうしてもことば・きこえの教室という、名前から、あ、やっぱり言葉に問題がある子が行くところなんだという、思われる方、確かにいらっしゃいます。その中で実態として、例えばコミュニケーションで、なかなか思ったことうまく伝えられないですとか、情緒的にどうも安定しない、手が出てしまったりという、そういった様態があった場合に、それぞれ学級担任がやはり、通常の指導の中だけではどうにも難しいところがあるなといったときに、校内でいろいろ検討した上で、やはり指導を受けたほう…専門的な指導を受けたほうがいいのかなといったときに、保護者にもその旨お話をして、このことばの教室というところはあくまで言葉だけではない、言葉を介してコミュニケーションの面についても指導が頂ける場所だということで、保護者の方々にも、先ほどの資料の一部、スライドの一部ですけども、入学時に、最初の入学説明会といいますか、各新１年生の保護者説明会で、こういうお子さんが通っていますというご説明もさせていただいていますので、言葉だけではない、いろんなニーズに応えていける教室としていろいろ周知をさせていただいておりますので、その一環で、また担任の先生も同じように、あ、こういうお子さんが通えるんだ、こういうことを一緒に相談できるんだってことも、年間の中の取組の中でさせていただいておりますので、むしろ気になるなというお子さんがいたときに、校内の検討した中で、こちらにご相談いただいて、一緒に相談に乗ったりですとか、実際の教室に行かせていただいて、様子を見させていただいて、じゃあ、こういうことができるかもしれませんねってご相談に応じる、そういったことでつながってくるケースというものは多くあります。

小 峰 委 員）　通級していただきましょうという判定というか、その辺の手続は、担任の先生

が、この子はできたら指導をしていただいたらいいなという思いと、通級の先生方との話合いで決まるのですか。その判断の基準みたいなものはどうですか。

小野総括教諭）　そうですね、基本的にはそういう判定という部分でいきますと、通常はこういう専門部会というものがありまして、その中で、このお子さんにとって、例えばこういう言語の指導が必要ですとかという、いろんなアセスメント、実態、この子の実態を把握をしながら、それぞれの意見を通して決定をしていくんですけども、最初にその判定に関わって、私どもが直接面接をして、親御さんも一緒に面談をしながら、その中でお困りのことを聞いたりですとか、実際の把握をしながら、そして担任の先生からの様子を聞きながら、総合的に判断をして通級ということで、その判定に関わっては一緒にやっております。

小 峰 委 員）　今、専門委員会というようなお話もありました。その専門委員会というのがあるわけですか。

小野総括教諭）　専門部会という形のものはあります。指導主事、私ども、校長先生の代表の方ということで、一応書類が作られてそのように動いております。

小 峰 委 員）　分かりました。ありがとうございます。

町　　長）　他にいかがでしょうか。下位委員。

下 位 委 員）　質問と意見を１件ずつ伺いたいんですが。

今、いろんなニーズに応えていけるという話もありましたので、名前が言語障害通級指導教室ですか。「障害」って取ったほうがいいんじゃないかなって気が前々から実はしていまして。文科との兼ね合いも多分あって、調べてみたんですけど、意外と全国的に見ると「障害」が入ってないことばの教室が多いような雰囲気でした。今すぐじゃなくて構わないんですけど、検討していただいてもいいのかな。そうすると、保護者の方も、言語じゃないけど相談に行きやすくなるんじゃないかなって気がしました。

あと支援学級、例えば葉小だと杉の子あると思うんですけど、役割分担はどうなっているんでしょうか。

小野総括教諭）　それでは続けて、通級指導教室、例えば言語障害通級指導教室、ちょっと堅い感じの名称には確かになっておりまして、一応正式名称なので、それを勝手には変えられないんですが、各教室、自治体によっては受け入れやすいように、確かにお隣の逗子市ですと通級指導教室やまびことか、通級指導教室しおさいですとか、やはりなじみやすいように、いろんな子が通ってますよという形の名称にもちろん変えているということはありますので、そういったものに、今後ご意見頂いて、検討はしていく意味合いは当然あるかなと、今、誤解を受けるということ

がもしあるとするならば、それは大事なことかなと思っております。ありがとうございます。

それと、特別支援学級とこの通級指導教室の違いって、よく聞かれるんですけども、実は、文科のほうでもたしか明確に言うと、この通級指導教室は通常の学級に在籍している、かつ通常の学級での学習に、学習におおむね参加できるというのが大原則であります。そういった部分と、その子の学習状態、生活状態を一日、毎日の生活の中でサポートしていくというのが特別支援学級の取組かなということと、こちらは通級ですので、決まった時間に、週１回程度の時間の中で、その教育的なニーズに対応していくということですので、支援の在り方そのものはちょっと違う面があるかな。特に自立活動という、教育課程上の位置づけで私どもやっておりますので、学習を中心にやる教室ではないというのが一番大きな点かなと思います。以上になります。

下 位 委 員）　ありがとうございます。そうすると、杉の子に入りつつ、通級支援教室にも来るという子は基本的にはいらっしゃらない。

小野総括教諭）　そうですね、両方受けるということは基本的には認められてないというか、そういうケースはほぼないです。

下 位 委 員）　承知しました。じゃあ、続けて、中学校との間に切れ目のない支援というお話が今ありましたけれども、小学校を卒業すると自動的に通えなくなってしまう、ことばの教室を卒業しなくてはいけなくなってしまうという仕組みなんでしょうか。

小野総括教諭）　ことばの教室が小学校までが一応国で決められている在籍ということになっております。もちろん、いろんなご相談があって、中学校の生徒さんが、相談があって、それを駄目ですってお断りしているわけではないんですけども、中学校の生徒さんも、部活があったり、また引き続いてどうしてもという中で、一部ご相談、話を聞いていくだとか、少しアドバイスをしたりですとか、そういうフォローアップ的な形で私どもの中では現状やっているのが、今、精いっぱいのところではあるんですけども、あとは現実的ないろんな制度的なものをどう考えていくか。また、人の問題もありますし、そこはまた一つの課題として、町として考えていく部分につながっていくのかなと思います。

下 位 委 員）　ありがとうございます。引き続きよろしいですか。

町　　長）　どうぞ。

下 位 委 員）　今、葉山の場合は、葉山小学校の所属として存在していらっしゃると思うんですけれども、これは、何でしょう、これ逆に濵名課長に伺いたいんですけど、仕

組みとして独立してるものにはできないんですかね。葉山小学校の中になきゃいけないものなんでしょうか。というのは、私が以前保護者…今も保護者なんですけど、小学校の保護者だった頃に、葉山小学校はことばの教室があっていいよねって言われたことがあるんです。なので、葉小じゃないと通えないと思ってる方がどうも少なからずいるみたいなので。というのが、もちろん相談に行ってればそんなことないんですよって分かると思うんですけれども。なので、そういったことがあるので、葉山小学校に所属してなくてもいいんだったら所属してないほうがいいんじゃないかなと思ったりすることがあったので、伺ってみました。

学校教育課長）　現状で言うと、教職員加配といって、指導する教員をどこかの学校に配置しなければならない関係があります。したがって、学校の中に通級を置いているのが一般的です。とはいえ、葉山町においては、この建物が建ったときに福祉的な要素も含めて、ことばの教室がこちらにあって、町としても全体のセンター的な機能を担っていただいている状況です。名称としては葉山小学校ことばのというふうに続いてしまうんですが、そこのアナウンスは、ホームページであったり、毎年新入生説明会や各学校の年度当初の職員会議等、様々な機会を通して周知を行っていただいております。そういった意味では、町全体のセンター的な施設として、まだまだ努力のするところ、余地はたくさんあるとは思いますけれども、そういったところを担ってもらってるという周知はできてきてるかなというふうに思います。

下 位 委 員）　承知しました。

町　　長）　どうぞ。

下 位 委 員）　先ほど中学校の話もあって、子どもから、もしくは親からすると、小学６年生から中１になった瞬間に全てが治るわけじゃないので、続けて見てほしいって正直な気持ちだと思うんです。ただ、片やその予算もあって、行政の機関であるので、ルールに従ってやらなきゃいけない部分もあると思うんですけども、ぜひとも中学生も、何かできることがあればそこは支援をしていただきたいなというのが親としての気持ちです。

そして、今、40人から50人ぐらい通ってるお子さんがいらっしゃって、職員の方が４名でやっていらっしゃる。その人数的には50人に対して４名というのは多いんでしょうか、少ないんでしょうか。現場の肌感的にはいかがですか。

小野総括教諭）　じゃあ、続けて。

町　　長）　どうぞ、お願いします。

小野総括教諭）　それぞれ担当４名おりますけども、いろいろ年数の違いであったり、また初め

担当になってから、その年数によってその経験値の違いというのはあったりはしますけども、おおむね、余裕があるかというと、余裕がそこまであるとは言い切れない肌感覚はありますけども、ただ、そうですね、もういろんなものが手につかないぐらいという状況では、そこまでではないんですが、特に葉山においては小学校４校から通っている中で、それぞれ児童、子どもの指導のみならず、保護者との面談であったり、保護者の、保護者教室というものを開催したり、各学校へ子どもの様子を見に行ったり、先生方と話をする機会を持っていったりですとか、そういったいろんな動きというものを踏まえたときに、今の人数というのは、もちろん同じようにできる方が５人、６人といればそれ余裕ができるのがありますけども、今、現状では何とかさせていただいてるかなということではあります。

下位委員）　承知しました。ありがとうございます。すみません、長々とありがとうございました。

町　　長）　ほかにいかがでしょうか。清水さん、どうぞ。

清水委員）　不登校のに関する報告を受け、利用者のニーズを考えた上で、『ことばときこえの教室』の名称変更に賛成です。現在、不登校だけれども、当教室にはは通えているというお子さんはいますか。いましたら人数を教えていただきたい。前年度に訪問した際に、人数もぎりぎりだけれども、保護者の方と面談したり、あと聴覚過敏のお子さんへ個別スペース確保など、空間が足りないというお話も聞きました。時間を工夫するなどやりくりしていますというお話でしたが、現状はどうなのかという点も教えてください。

小野総括教諭）　まず、不登校の関係でいきますと、もちろん不登校をどんどん受入れますという教室ではありませんので。ただ、もちろん学校との関係、そして通ってきている間は大丈夫だったんですが、たまたま不登校のいろんな状況になってしまったとか、そういったケースはあります。今、行き渋りの傾向を踏まえると、２人ないし３人程度かなとは思います。それが毎年かというと、毎年同じではないんですが、じゃあ、ゼロかというとゼロとも言えない。大体それぐらいの人数で推移していることが多いかなと思います。

その上で、この教室の指導の体制であったり、お部屋の部分は、もちろんそのときからお部屋の数が増えてるわけではないので、工夫しながらというのは変わらず。例えば面談ですとか、どうしても足りないってときに、こちらの旧研究所のお部屋をお借りしたりですとか、工夫しながらというところで…いうところはそこまで大きくは変わっておりませんので、何とかやっておりますというのが正直なとこです。

清 水 委 員）　分かりました。以上です。

町　　長）　ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。私から少しだけ確認したいことがあるんですけども、小学生の１年生にこういった案内をして説明会をする。それ以降、４、５、６年生には案内する機会はあるんですか。

小野総括教諭）　毎年毎年、それぞれの学年でというところまではできていない状況で、毎年新しい１年生の保護者の方には各学校にてお知らせはしているというのが現状です。

町　　長）　分かりました。それから、名前を変える話が出ておりましたけれども、実は来年度に向けて町役場のほうで男女共同参画事業というのがありまして、これは国からの事業なんですけども。男女共同参画、今の時代に対して、今さら何を言ってるんだという話なんですね。なので、ジェンダー平等推進計画というふうに名前を変えます。ただ、残念ながら、国の事業名が変わらないので、副題に「男女共同参画」と入れないと私たち公務員が分からなくなっちゃうんですね。これ何の計画なんだろうって、入れます。もしよければ、そのように、国関係の事業名、成り立ちは必要だと思うんですけれども、先ほどお話ししたように、葉山小学校所属というのはどうしても多分必要な制度だと思うんですが、外向けの発信する内容については、例えば葉山小学校という名前をつければ勘違いされる方がいらっしゃる。ことばときこえというと、それ以外のコミュニケーションができない場合はここに行くべきじゃないんだみたいな話にならないように、包含した言葉になるといいなと感じました。私のイメージとして勝手な見解ですけど、例えば附属小学校って名前で一言添えてもいいんじゃないかと。町立附属小学校。何の学校か分からないですけど、何か面白いので行ってみようかとか、見てみようかという気持ちになるなと思いながら話を聞いていました。いずれにしても、何か制限してしまっているような言葉に取られると、いろんなものを包含しているはずなのに、すごくもったいない感じがあったので。ぜひ、小学校、どこの小学校にも附属している、どこでもいいですよ、どうぞ、困った方は来てくださいというような、間口が広くていいんじゃないかなって気がしました。

小野総括教諭）　ありがとうございます。

町　　長）　ありがとうございました。では、今お話あったように、不登校といじめの問題、そしてことばときこえという、それは障害という以前に、発達の中でお困りのある方々をしっかりサポートするという機関の話がありました。いずれにしても連動している話です。お話にあったとおり、そこからいじめに発展する、不登校に発展する、いろんなケースがありますので、全体感を通して、今の葉山町の社会

の在り方について、また学校のこれからの在り方について、皆さんから本当にボーダーレスでお話をしたいと思いますので、ご意見、コメントございましたら、ぜひお願いいたします。小峰委員、どうぞ、お願いします。

小 峰 委 員）　葉山の中の支援教育について、ちょっと長くなるんですけど。私は大事な点は４つほどあるかなと思いました。

まず１つが、不登校とかいじめって個人の問題として捉えがちだけども、それを生み出している学級という集団の在り方、それをきちっと丁寧に分析しないといけないんだろうなと思っています。学級に対して子どもが満足していればあまり不登校にはならないだろうし、いじめも起きる可能性が少ないのだろうと思います。子どもがその学級に満足しているか、学校生活に対して意欲的に取り組んでいるだろうかという、個々の子どもだけではなく、学級全体として見るようなアプローチが一つは必要じゃないかなと思います。一人一人の子どもがどういう位置関係というか、学級の中でどういうふうな居場所を自分で持てているかということを探っていく、そういうアプローチの仕方をぜひ手法として先生方に学校全体で持っていただくことが大事かなと思いました。

今日、午前中の教育委員会での文科省の研修会参加の報告の中で、清水委員が参加された分科会でも、ＱＵアンケートが紹介されていたそうです。学級満足度アンケートというのですけど、去年、私の参加した分科会でも、それを活用して取り組んでいる学校…限られた学校じゃなく、教育委員会として各学校に取り組ませているという紹介もありました。私自身も現役で学校にいるときにも、それを利用して、それぞれの学級の問題点を探り出し、いわゆる学級崩壊になりかけているようなところを見つけ出し、みんなで対策を練ったりしたこともあって、そのときに客観的な手法として役立ったことを経験しています。ＱＵアンケートを宣伝するわけじゃないですけども、何らかの方法で各学級が、落ち着いている学級なのか、それとも、やや、何ていうか、理不尽な子どもに振り回されているような学級なのか、その原因がどこらあたりにあるか、というようなことをきちっと見定めて、それに対しての対応がまず大事じゃないかなと思いますので、このいじめ、不登校に関わっている先生方のアプローチの仕方を、ぜひ教育委員会として指導していただけたらなと思ったのがまず第１点です。

それから２点目が、リラックスルームとかリソースルームって、居場所をつくるということについては大変効果はあると思うんですけど、居場所づくりだけでいいかどうか。そこに行く子どもたちについてもやはり個別の支援計画というのが必要ではないかと思うんですね。そこに行った子について、どういうアプロー

チをして、その子の段階的な成長をどうやって見ていくかということをきちっとしないと、ただ行って心や行動が安定したから教室に戻る、それを繰り返していれば、その子にとってメリットがあるかというと、そうではないと思うんですね。同じ時間帯学校にいるのにもかかわらず、何もそこに支援とか指導がないと、その子にとって、情緒的には安定するかもしれないけれども、その子の成長に関われる、大人の手が差し伸べられないと意味が半減するかなと思うので、さっき私がなぜ手続上のことをこだわったかというと、そこに行って、その子にどういう成長を期待するかということを知って、手続上のことも含めて、個別支援計画をきちっと立てた上で、担任の先生、それから保護者、それからそこを担当してくださる指導者の方というのが三者一体になって、その子どもの成長を見守っていくということも含まれて、リラックスルームとかリソースルームの意味があるのかなということを感じました。

それから３番目は、先ほどのことばときこえの葉山の教室のことですけれども、やっぱり言葉と聞こえについての指導と、情緒的に課題がある子どもとは、全く指導が違うと思うんですね。そこをひとまとめにして先生方にお願いするというのは、かなり大変なことだと思う。だから、もし通級指導教室、中学校に行ってもそれを続けられることが理想的だと思うので、ぜひ、２つの通級指導教室をつくっていただくような方向で、今後目指していただけたら、先生方にとっても専門性が生かせるし、子どもたちにとってもいろいろと指導がもっと細かくできるんじゃないかなということを感じました。

それから４つ目は、さっき濵名課長もおっしゃっていましたけれども、スクールカウンセラーなど、心理的な面のサポートだけではなくて、場合によっては医療的なサポートというか、そこでの診断が必要な子もいるんじゃないかというようなお話が出ましたけども、朝起きられないから学校に行かれないとか、どうしても夕方になってから行動するというような子どももいます。気持ちの上で嫌だから行かないんじゃなくて、体のほうで、例えば起立性調節障害というんですか、どうしても体が言うことをきかないなどの症状が出るような場合もあり、やっぱり医療的な対応をしないと無理だという子もいると思うんですね。それが何となく心理的な、学校に行きたくないから怠けの不登校になっているんじゃないかというふうに処理されてしまうと、その子にとっても家族にとっても救いがない。そういう面では適切に医療につなげる必要があるというような診断できるようにするシステムもできたらと思います。

これは私は聞いた話なので、正確ではないかもしれないんですけども、人間っ

て適度な刺激があって、競争したり、対立したり、そうすることで、生きるのに必要なホルモンが出てくる。それが全くない、１人でずっと引きこもっているとそういうホルモンが出てこないので、鬱状態になったり、生きる気力がなくて結果的に短命になるというような話を、お医者さんがしてらっしゃるのを聞きました。今の私の話で全部正確ではないんですけども。ということは、やはり子どもを孤立させてはいけない。できるだけ道筋をつけて、友達とかそういう仲間の中でもみ合ったり、けんかしたり、競争したりするような生活に近づけていくということが必要だと思うんですね。そういうことも含めて、医療面からアプローチしてやるということも今後は大事なのかなと思いました。

すみません、長くなりましたけど、私は今、葉山町の課題として４つぐらいのことを解決できたらいいなと思いました。以上です。

町　　長）　いえいえ、ありがとうございました。では、ほかの委員の方、いかがでしょう。じゃあ、下位さん、お願いします。

下位委員）　私は子ども１人しかいませんが、彼が小学校１年生に入ったときに…違いますね。幼稚園の年長のときに、幼稚園から課題がありますという話をいただき、その当時の教育委員会の指導主事に多分話が行って、指導主事に会ってきてくださいっていわれて、委員会でお話をしました。さらに、指導主事の方が幼稚園に見に行ってくださり、立ち歩きだったんですね、先生が読み聞かせしているときに、うちの息子だけ１人でこう歩いて回ってる。だから、それを見た指導主事が、普通教室、普通のクラスよりも支援級のほうがいいんじゃないですかって言われました。いろいろお話を伺い実際行ってみて感じたんですけども、ほかの子どもたちも支援級にいるからって区別もしないし、基本教室にいて、たまに支援級に行くんだというようなやり方ですし、なのですごくよくて、結局、１年生から４年生までは杉の子に通いながら普通の教室に入って、５年生、６年生は普通の教室だけでも通わせていただきました。中学校は最初から支援級に入らないで今に至っており、葉山小学校の支援級には非常に感謝しています。

先ほどおっしゃってた１年生のときの入学説明会でもちろんお話あったと思うんですけども、恐らく幼稚園とか保育園と連携してる部分があるんじゃないかなと思うので、すぐに相談があったのかもしれないです。それも非常に感謝していて、やはり親としてはうちの子に限ってって思うので。何かしらこうアプローチされなければ多分入れようって話にならないと思います。そういうきっかけをくださったことに感謝してます。これがもっともっと充実していって、今、本当は入ったほうがいいんだろうなって思う子どもが入ってないのであれば、そういっ

た児童たちをまとめて入れるわけにはもちろんいかないんですけれども、そういった子もうまくこう巻き込んでいけるような指導できたらいいんじゃないかなと思いますので、ぜひとも今後にも期待させていただきます。

町　　長）　ありがとうございました。続いていかがでしょうか。鈴木委員、どうぞ。

鈴 木 委 員）　僕はこの問題については、この全ての支援に関する思いなんだけど、学校や、町でできる限界があるんですよ。最終的には親御さんの理解が必要なんですよ。教育長とよく話すんですけど、いじめも不登校も、この学校支援についても、我々はできる限りのことは、今考えついたことをやろうと、今もちろん小峰委員や、各３人の委員から提案が出たりね、やらなきゃいけない、変えなきゃいけないことはあるんだけど、親と連絡が取れない子が支援に行ってどうやって入れるんだという話になっちゃうわけね。そこはどうしても抜け落ちてしまう。

そのためには、やっぱり下位委員が先ほどお話をしたように、親御さんがどういう感覚で、どう頑張るのか。やっぱりこちら側がアプローチすれば、行政は必ず応えてくれて、よくなってくるわけですね、何だかんだ言いながらも結果的には。だから、この支援のことをいろいろ町としても、教育委員会としてもやらなきゃいけないし、やっていく必要性が当然あるし、今の状態を変えなきゃいけないのは事実なんですけども、一番の根本は親御さんだと私は思っている。そこを抜きに議論することのできる話じゃないと私は思ってる。親御さんとそういう話ができない家庭に、じゃあどうするかっていったら、どうにもならないというのは正直私の気持ちなんです。それを学校が、奥村先生や小野先生のところで何とかそれやってくださいというのは、それは無理だなと思うんですね。やっぱり親御さんなりの考え方なり努力がまず根底になければこの問題は解決できないんじゃないかなと常々思っているので、そこだけ最後に触れておきたかったなと。家族なり、親御さんが本当に真剣にどう向き合っていくかということがまず大事で、それがなければ問題の解決はあり得ないんだというふうに、個人的には思っています。以上でございます。

町　　長）　ありがとうございました。清水委員。

清 水 委 員）　皆さんのご意見を聞いて、先ほどのアプローチできていないご家庭への対策が重要と再認識しています。すでに校長先生が訪問するなど対策をされてはいますが、町長も虐待とかはないですかとおっしゃったように、取り残されている児童の状況が心配です。鈴木委員がおっしゃったように、ご家庭との関係性が大事だと思います。ことばときこえの教室に保護者の方も相談できるというのはあまり知られていないことですが、今後その役割が重要になると思います。特に学校や

先生自体に拒否感がある方に有用と思われます。研究協議会で紹介された阪南市では学校とは別の機関であり、独立した建物にある教育支援センターで対応をしています。児童だけでなく保護者も利用できる呼びかけをし、すごく効果を得てるそうです。そのような機関としての役割がことばときこえの教室にますます期待されるように思います。葉山小の附属だけれど、学校外にあるということ、教育委員会の同建物ではありますが、その点が良いと思います。今後さらに保護者の方の相談も受け入れられる機関として機能を重視、周知していただけたらと感じましたし、何とか取り残されているお子さんたちをどこかにつなげていくことを、一番の早急な課題として取り組む必要があると思います。以上です。

町　　長）　ありがとうございました。

教　育　長）　いろいろとご意見ありがとうございました。お時間のない中、すみませんでした。

この３年間、葉山の支援教育の実態及び、それから町、それから教育委員会が一生懸命やってるところ、ある意味では内部に３年間いるわけですが、一方客観的にも見させていただいているところがあります。そういう中で、もともと教育委員会内部の課長等にもお話をしているのは、葉山は基本的に他自治体に比べると非常に支援教育に対しては手厚いです。ほかのところに比べれば、本当に丁寧に一人一人を見ようという姿勢が見られる、これがまず重要なことだと思っています。そこになかなか手が届いてないというのが、恐らく他自治体の実態だと思います。いろんな形で花火は打ち上げている治体はありますが、それはもしかして本当に地に足のついた支援教育であるのかというところについては、どうもそうではないんではないかなという気がしているところがあるので、葉山がやってきていると足らない部分、今日ご指摘頂いた部分も含めて、何をそこに補完していけばいいのかというところをしっかりとパッチ当てをしていくことがまず必要だというところでしょう。

それから、今日比較的話題になった、なかなか手が届かないところに今いる保護者、児童・生徒というものがいるのは事実だと思いますが、本来筋からいけば、その保護者、お子さんは最初から家に閉じこもっていたわけではないはずなんですよ。となったときには、どこの、何の原因でそうなったのかは必ず存在していて、きっと学校関係者の誰かは何かを多分知ってるんですよ。でも、そこのアプローチが明確にされてないままの状況で違う担任に受け渡されたり、あるいは小学校から中学校に進んでいく中で、より悩みが保護者とともに子どもも深まっていっているという実態が、恐らく手が届かないところに私たちから見るといると

いう状況になってると思います。

本来筋からいけば、先ほど申したとおり、手が届かないところにいく前に、教育にできることがあったんだと僕は思ってるんですね。そこまでいってしまうと、確かにそう簡単には引っ張り戻せないんですよ。これも私、高校の教員ですので、高校で、高校に入学してくる、それも、前申し上げたとおり、湘南高校には定時制がございましたので、定時制に来る子たちにはそういう子たちが多かったですし、入学式から一回も来ない子というのは存在しますし、通信制の高校にもいましたんで、そこにはもうまさしく、大人になっても閉じこもってる子もいるという状態の中から考えていくと、まさしくどこかで誰かが引っ張り出すためには、少し町長もお話がありましたが、そこまでいくともう二次障害完全に発症していますので、医療が確実に関わるところになってくるんです。それとは違う、私たちが今関わっている小・中の児童・生徒さんたちの部分で、まだやれることは本当にないのか、もう一回スタートラインに立ち戻ることができないのかというところについては、何かまだ可能性が残ってるんじゃないかなということ。

それから、特に、今日は中学校の先生は見渡す限りは濵名さんしかいないのかな。中学校については出口理論が存在していて、高等学校に進むという、どちらかというと、今まで保護者の保護に完全にあったところから自立せざるを得ないという、一つの15歳という春がやってくるわけです。そうすると、なぜかその後で知らん顔して学校に行き出す子たちというのがいるのも実であるんですね。これは幾らでも見てきていますので。じゃあ、それは一体何だったのという話については、子どもたち、つまり学校に行ってなかった子たちが、突然高校に行くと行き出した子たちとはさんざんしゃべってきましたので、代替要因は見えているところがあります。ある意味では、鈴木委員がおっしゃっていただいたとおりの内包される部分については、ご家庭での様々な、いわゆる会話なのか対話なのか、あるいはその中の信頼関係の欠如なのか分かりませんが、そういうことが非常に多いのは事実です。そこに対して私たちが小学校・中学校の職員としてどうアプローチをするのか、すごく難しいです。

今日の話の中でいくと、ことば・きこえの先生お２人来ていただいてますが、ことば・きこえの１年間の指導を見ていると、一番重要なところが全てやられているので、保護者の方々と子どもたちが比較的放課後になると楽しそうにやって来て、楽しそうに帰っていくと、これが重要なことですね。恐らく細かい形での対話ができている、信頼関係がそこで構築されているので、自分自身がもう一回楽しく生きていこうということが子どもたちに生まれている。自分の子どもを信

頼できる状況が生まれてるというのが、そこに関わっていただいていることば・きこえの先生たちはすばらしいことをやっているということをやっぱり考えていただいていいんだと思います。

ですので、通級教室という物の考え方は、葉山の場合には葉小の附属としてここの上に存在していますが、自治体によって通級の在り方は様々です。ですので、今後どういう形で通級を持つべきなのか、それから、小峰委員がおっしゃっていただいたとおり、場合によっては様態によって２つに分ける必要性があるのか、あるいはこれは制度面の問題からして、分けた結果として、かえってよくなくなる可能性もありますので、なかなか難しい点もありますので、またここは検討させていただければと思ってます。

いろいろと今日は改めて勉強もさせていただき、それから安達先生にわざわざおいでいただきましてありがとうございます。また今後もずっと続いていく課題ですし、できれば目標ですけども、葉山はもう不登校ゼロというふうに目標値を一回定めないと、不登校があるのが当たり前だと考えること自体をやめていくべきかと思いますね。ただし、文科が定めている現状のいじめ防止法案の中でのいじめという概念からすれば、いじめはゼロにはなりません。そこについてはまたきちっと物の考え方を整理をしながら、学校の先生たちも理解をしながら進めていくべきだなと、今日は伺いながら思いました。ありがとうございました。

町　　長）　ありがとうございました。大分時間も迫ってきましたので。

私がいつもこういう話を聞かせてもらっているときに、いつも答えというか、コメントにすごく困るのが教育の世界でして。要は価値観が、今日皆さんも、何度かこの「課題」という言葉を使っていましたけど、その課題が本当に課題なんだろうかと。今、まさにフリースクールの議論で、とある自治体の首長が、フリースクールやったら学校教育かみたいなことをおっしゃってましたけど、あの意見は、僕は固まってるなと思うんですけど、ああいう見解を持つ方の気持ちも分からなくもない。一方で、葉山に比較的多いと思うんですけど、別に学校に行かなくてもいいんじゃないか、その場で自分に合ったものを学ぶことで個性を伸ばせばいいんだという考え方、片やフリースクールやオルタナティブが今盛んになっているということ、これも決して間違ってないとも思うんですね。両極にあるように感じるんですけど、その結果、子どもたちや私たちも含めて、どのような大人になって、どのような社会をつくるかというものが、ビジョンが誰も見えてないというのが大きな、もしかしたらそれこそが課題なのかなという気がすると、私自身どういうふうに子どもたちに育っていってもらえばいいのかが、率直に言

って分からないんです。何か、こういう皆さんの議論を本当聞いてると、いつも行き着くのが、「葉山だけでも」という、ちょっと申し訳ないんですけど、葉山だけでも子どもたちが本当に一人も学校に漏れることなく、葉山の親だけはみんなと密につながっていて、漏れるところは誰かが支えられる。その中枢にやっぱり先生方がいらっしゃって、教育というものを専門的に支えてくれてる、そこに私たちがサポートに入ったり、地域の方が入っているという。葉山外のことを考えると社会性や、やっぱり経済問題も絡んでくるんですけど、葉山ならばというふうな気持ちになっている答えを私自身は求めているようにしているんですね。

そういう意味では、今日のプレゼンテーションは、葉山においては本当にすばらしいお話を聞かせていただきました。本当に今日のお話を聞いて、先ほど鈴木先生がおっしゃってましたけど、葉山がこうしっかりしてるものを、私たちがこう何かあったときに頼れる機関があるというのは本当にすばらしいことなので、もし課題として言うのであればですけども、もっと先生方からのアピールというか、課題発信を私たちにもらえることなのかなと思いました。皆さんがそれぞれ多分頑張ってるんですね、葉山の人って。だけども、それがこう、もう少しお互いに寄りかかり合って、できないことができない、分からないことが分からないと言える関係を築くことが本当の真の連携だと思っています。なので、私、今日、ぜひ皆さんの活躍を広報でお知らせして、もっともっと困ってるお父さん、お母さんも、子どもたち自身もいると思うので、もっとことばときこえの教室に簡単にアプローチしていただけるような方法があったらいいなと思いながら聞いていましたし、松本先生もね、人が作ったプレゼンテーションなのにすごく丁寧にプレゼンをされていらっしゃって、急遽大変だったんだなと思いながら伺ってましたけども。不登校ゼロに向けて、多分そこにフリースクールやオクタナティブでやってる方々も巻き込んでいって、彼らも学校と一緒にいるという意識を持つことには決して抵抗する方々じゃないと思うので、一緒になって子どもを支えるという大命題を教育委員会が主導になってもらいたいと思いますけれども、一緒につくっていけると、本当に葉山に関しては、私たちのこの町、私たちの社会は本当にみんなが望むものになっていくんじゃないかなと思っています。その先がどうなっていくかということについては、みんなで楽しみにして過ごしていけばいいんじゃないかなと思っていますので。今日本当に私自身も学びも頂きましたし、また新たに深い悩みも聞くことができました。

では、皆さんよろしいでしょうか。ほかにコメント等がありましたら、お願いします。鈴木委員。

鈴 木 委 員）　じゃあ、１つだけ。ことばの教室の、全小学校が対象にということを分かるように、一遍出してみたらいいんじゃない。要するに全小学校対象で使えますよというのを出すというのを一回考えてみたら。行政の関係で葉山小の一部だって言わなきゃいけないのは分かるんだけど、周知していくということは大事なんじゃないかなって感じがする。

町　　長）　私立は駄目なんですね。

教　育　長）　小学校の公立に在籍している４校の子たちだけが今のところは対象になってますよね。

小野総括教諭）　一応基本はという言い方なんですけど。実はこれまで私学のお子さん、葉山に在住の私学に通っているお子さんのご相談で、余力のある範囲でご相談させていただいたことはあります。

町　　長）　あと皆さんよろしいでしょうか。

では、本当に貴重なプレゼンテーション、どうもありがとうございました。

では、議論も尽きないところありますけども、大分その他項目も含めて議論が進んだかとは思います。

以上で協議事項は終了としたいと思います。どうもありがとうございました。

では、事務局のほうにお返しいたします。

（閉会宣言）

教 育 部 長）　それでは、以上をもちまして、令和５年度第２回葉山町総合教育会議を閉会いたします。

時刻は15時55分です。お疲れさまでした。